コーパスによる日本書記古訓形容詞「カシコシ、サカシ」に関する調査

劉 琳（北海道大学大学院文学研究科）

Corpus-based Study of Adjectives "kashikoshi" and "sakashi"in Old Manuscripts of Nihon Shoki

Liu Lin (Graduate School of Letters Hokkaido University)

要旨

形容詞「カシコシ、サカシ」は『日本書紀』において漢字・漢語の解釈である和訓として多く使われた。一方、和文の文学作品においてもこの二語の使用が多く見られる。本稿では、『日本書紀』における漢字「賢」に関わる古訓形容詞「カシコシ、サカシ」の二語を取り上げ、まず日本書紀古訓としての意味用法を中心に検討する。次は「カシコシ、サカシ」が上代から現代への意味変化の実態を明らかにするための考察の一階梯として、上代、中古の文学作品に使用された「カシコシ、サカシ」の用例を抽出し、日本書紀古訓と平安仮名文学における意味的特徴を明らかにした上で、上代以降の歴史的な変遷の実態を記述する。用例の収集にあたっては、「日本語歴史コーパス」（国立国語研究所）、『新編日本古典文学全集』（Japan Knowledge Lib）などを利用した。

1. はじめに

『日本書紀』において形容詞「カシコシ」は一般に「畏、懼」に、「サカシ」が「賢、哲」などの漢字に附された和訓として用いられている。漢字の字義を考えると、『日本書紀』における「カシコシ」は主に「畏怖、畏敬」の意味、「サカシ」は「賢明」という意味を表すと推測される。『古事記』、『万葉集』における「カシコシ、サカシ」の和訓を充てられた漢字を見ると、万葉仮名以外に、『日本書紀』とは変わらない漢字を用いた。一方、『日本書紀』の各古写本において、「カシコシ」は次のような漢語の和訓として使われた用例も見られる。

①賢愚－カシコクオロカナルコト（岩崎本）、②智謀－カシコキ（北野本）

③英才賢徳－カシコクサカシクマシマス（圖書寮本）」

更に、1540 年に書写した兼右本日本書紀における「賢哲（才智のある）」の和訓には「左訓：カシコキヒト　右訓：サカシヒト」の二種が見られる。

上記の用例をみると、日本書紀古訓の「カシコシ」は「畏怖」の意味以外に、「才智のある」という意味も表し、「サカシ」とは意味的に共通な面があると思われる。

ここから、古代において「カシコシ」は主に「畏怖、畏敬」、「サカシ」は「賢明、才能がある」の意味として使われ、二語は意味的に共通な面があることが分かる。

次は、現代語の「かしこい、さかしい」の意味用法について国語辞書を用いて調べると、「カシコイ」は主に「頭がいい、利口だ」の意味として使われている。「さかしい」は現代語において方言として生き残る言葉[1]であり、「かしこい、利口だ」の意味を持つが、現代においてほとんど用いられず、「こざかしい」のようなマイナス的な意味は普通に用いられる[2]。また、「さかしい」の使用状況について、「web データに基づく形容詞用例デー

[1]『新明解国語辞典（第 7 版）』

[2]『現代形容詞用法辞典』

タベース」を用いて調査し、一例も見つからないが、「こざかしい」は 1366,461 件の用例がヒットした。

このように、「カシコシ、サカシ」の意味用法が変遷したことが分かった。この二語は現代語に至るまでどのような変遷を経てきたのか、どのような理由によって意味変化が生じたのか、取り組むべき課題が多くある。本稿はこれらの問題を解決するための考察一階梯として、まず上代、中古における「カシコシ、サカシ」の意味用法を確認し、意味的特徴を明らかにする。そして、この二語が上代以降の歴史的な意味変遷の実態を記述する。

2. 国語辞書における記述及び先行研究

「カシコシ、サカシ」の「語誌」について、松浦(1983)は次のように説かれている。[3]

「カシコシ」は記紀、万葉の時代から多く用いられたが、畏怖、畏敬の念を表す心情表現の語であった。その意味は現代語の「頭がよい、利口だ」といった、知恵、才覚についてのものではなかった。

「サカシ」は上代において、知恵や才覚の優れた意味を持つ語として使われ、高い評価を伴う語であった。平安時代から意味が変遷し、現代語の「コザカシイ」に通じる低い評価を与えられている語になった。

上記二語について、上代から中世までの意味用法を『時代別国語大辞典』を利用して確認し、次のように語義を記述されている。

『時代別国語大辞典(上代編)』

■　カシコシ【恐・畏】(形ク)

①恐ろしい。②恐れ多い。③驚くべきである。ただごとではない。

■　サカシ【賢】(形シク)

賢明である。

『時代別国語大辞典(室町時代編)』

■　カシコシ【畏し・賢し】(形ク)

㊀すぐれた絶対的な力に対して、おそれ、敬う気持ちである。(畏敬の対象：①神仏などの霊力、②天皇などの権威、③卓越のもの)

㊁人のすぐれた知的能力が、感心させられるほど適切に機能するさまである。(①知恵、適切な判断力、②優れた能力、③適切な対処、④思いもよらずめはしが利く)

■　サカシ【賢し】(形シク)

①才気をたのみ、ぬけめなく、すばやい判断を下すさまである。

②丈夫で、無病息災である。

この記述内容をみると、上代以降この二語の意味用法が拡大し、「カシコシ」は「才知、能力がある」という意味を持ち、「サカシ」と共通な意味を持つようになった。「サカシ」の「丈夫で、無病だ」という意味は上代では見えない。そして、松浦説の低い評価の用法が中世までは見えない。

「カシコシ」について、『源氏物語』における用例を分析し、論考したのは東辻(1967)である。山崎(1977)は「サカシ・サガシ」といった二つの形容詞についての論考である。そ

[3]佐藤喜代治編『講座日本語の語彙 9 語誌Ⅰ』p 199－203

して、土居(2001)は『土佐日記』にある「さかしきもなかるべし」」をめぐって、平安時代和文における「サカシ」の意味用法を論述した。本稿では、以上のことをふまえて、上代・中古の文学作品に使用された「カシコシ、サカシ」の意味用法を分析し、意味的特徴を明らかにする。

3.『日本書紀』における「カシコシ、サカシ」

『日本書紀』古写本[4]を利用し、「カシコシ、サカシ」の訓を持つ漢字・漢語を収集し、次のように示す。

◆　カシコシ

畏、懼、威、稜威、賢、智謀、英才、貴、重

上記「カシコシ」の訓を持つ漢字・漢語を見ると、「畏、懼」の二字は意味的には近いと推測される。このように上記の漢字を大きく①「畏、懼」、②「威、稜威」、③「賢、智謀、英才」、④「貴、重」の四組に分類できる。これから原文において、文脈に基づき各用例の意味用法を確認する。ここでは、用例の一部を示す。

①「畏、懼」

(1) 原文：仍奏表之曰「天上有神、地有天皇。除是二神、何亦有**畏**(カシコキコト)乎。」（岩崎本訓）

訳文：そして、上表文を奉って、「天上に神がおいでになり、地には天皇がおいでになります。この二神のほかに、どこに**畏敬する**ものがありましょうか。…」[5]

(2)原文：　於是天皇詔之曰「是陵自本空、故、欲除其陵守而甫差役丁。今視是怪者、甚**懼**(カシコシ)之。無動陵守者。」則且、授土師連等。（前田本訓）

訳文：そこで天皇は詔して、「この陵はもともと空である。そのため陵守を廃止しようと思って、初めて役丁に徴発したのだ。今この不吉な前兆を見ると、はなはだおそれ**恐れ多い**。陵守を廃止してはならない」と仰せられ、すぐにまた陵守を土師連らの管掌下に置かれた。

②「威、稜威」

(3)原文：則謂夫曰「汝祖等、渡蒼海跨萬里平水表政、以**威**武(カシコクタケキ)傳於後葉…」（圖書寮本訓）

訳文：そこで夫に語って、「あなたの先祖たちは、蒼海原を渡り万里を超えて、**畏敬すべき**武力をもって後世に名を伝えてきました…」

③「賢、智謀、英才」

(4)原文：相共**賢**(カシコク)愚、如鐶无端。（岩崎本訓）

訳文：お互いが**賢**であり愚でもあって、鐶に端がないようなもので区別はつかない。

(5)原文：億計王曰「弟**英才**(カシコク)賢德(サカシクマシマス)、爰無以過。」（圖書寮本訓）

---

[4] 古写本の岩崎本、圖書寮本、前田本を利用した。兼右本と寛文九年版本について筆者が以前収集した 22 と 24 巻のデータも利用した。神代巻に関して、『六種対照日本書紀神代巻和訓研究索引』を利用した。また、『訓点語彙集成』も参照した。

[5]用例の現代語訳は『新編日本古典文学全集(小学館)による

訳文：億計王は、「弟は**才能があって**賢く徳もある。これに勝る人はいない」と仰せられた。

(6)原文：既而天皇謂高市皇子曰「其近江朝左右大臣及**智謀**(カシコキ)群臣共定議…」（北野本訓）

訳文：やがて天皇は高市皇子に語って、「いったい近江朝では、左右大臣と**智略にたけた**群臣が協議して事を決定している。…」

④「貴、重」

(7)原文：額搶地叩頭曰「臣之罪實當萬死。然當其日、不知**貴者**(カシコキヒト)。」（圖書寮本訓）

訳文：額を地面につけて叩頭して、「私の罪は実に死に当たります。しかしながら、あの日は、**貴い人**だとは存じあげませんでした」と申し上げた。

(8)原文：「愛之叔父、勞思、非一介之使遣**重臣**(カシコキマチキムタチ)等而教覺、是大恩也。（北野本訓）

訳文：「親愛なる親父は私を労わって、使者一人だけではなく**重臣**たちを遣わして教え諭された。これは大いなる恩愛である。

例文(1)は神、天皇のような権威のある者に対する恐れ敬うことを表す意味であり、『古事記』にも同じ用法が見られる。例(2)は霊力のあるものに対する恐れる気持ちである。例(3)は威力のあり、すぐれる人に対する畏敬の気持ちを表す。例(4)(5)(6)は訓と対応する漢字が異なるが、意味的には共通する部分がある。いずれも才能、思慮を意味している。例(7)(8)は身分が高い意味を表す。従って、『日本書紀』における「カシコシ」には①霊力、権威に対する恐れる気持ち、②才能のある、身分の高い者をおそれる。敬うべきだ」などの意味をしている。そのうち、①の意味を表す用例が最も多い。

『訓点語彙集成』において「カシコシ」の訓を持つ漢字を確認すると、「尊、貴、賢」以外、ほかは全部「畏怖」の意味を持つ漢字である。「英才、貴者、貴国」に附される訓として、「才能のある。身分・国が優れる。あがめ敬うべきだ」という意味を持つ用例は『日本書紀』にしか見えないのである。

◆　サカシ

「サカシ」の訓を持つ漢字・漢語は「賢、賢哲、賢徳、賢聖、哲、明哲、師、叡智」などが挙げられる。

(9)原文：所寶惟**賢**「(サカ)シク、サカシキヒト」、爲善最樂。（前田本訓）

訳文：宝とすべきは**賢人**であり、善を行うことを最大の喜びとする。

(10)原文：及乎繼體之君、欲立中興之功者、曷嘗不賴**賢哲**「(サカシ)ク」之謨謀乎。（前田本訓）

訳文：皇位継承の君主として、中興の功を立てようとすれば、昔からどうしても**賢哲**の策謀に頼らなければならない。

(11)原文：天皇、以心爲**師**(サカシ)、誤殺人衆、天下誹謗言「太惡天皇也。」（前田本訓）

訳文：天皇はご**自分の判断をただしい**とされたため、誤って人を殺すことが多かった。天下の人々は誹謗して、「大悪の天皇である」と言った。

(12)原文：天皇、幼而聰明**叡智**(サカシクマシマス)、貌容美麗、及壯仁寛慈惠。（前田本訓）

訳文：天皇は幼少の頃から聡明で**叡智**があり、容貌も美麗でいらっしゃった。成年に及んでは、大そう思いやりがあり情け深くていらっしゃった。

「サカシ」の意味にはプラス評価とマイナス評価の両方ある。『日本書紀』においては、「サカシ」は上記例文のように「賢」、あるいは「賢」字で構成する漢字熟語、「賢」と近似的意味を持つ「哲、叡智」などの訓として使われている。これらの漢字・漢語は、いずれもプラスの評価を持つものである。当然それと対応する訓としての「サカシ」は、マイナスの意味用法が見られない。

4. 平安時代文学作品における「カシコシ、サカシ」の意味

「カシコシ、サカシ」の中古における意味用法について、国立国語研究所が開発した「日本語歴史コーパス」の平安時代編を利用して用例を収集した。平安時代編には『古今和歌集』、『土佐日記』、『竹取物語』、『源氏物語』、『枕草子』のように和歌、日記、物語、随筆の各ジャンル全 14 の作品が収録された。検索された用例数からみると、「カシコシ」は『源氏物語』が最も多く、136 例があり、その次は『枕草子』の 34 例である。「カシコシ」に対し、「サカシ」の用例は少ない。同じく用例数が最も多いのは『源氏物語』で、30 例あり、『枕草子』は５例ある。本稿では、『源氏物語』及び「枕草子」の用例を中心に検討する。

◆　カシコシ

『萬葉集』、『古事記』、『日本書紀』には「カシコシ」は主に「畏怖、畏敬」の意味を表す。『日本書紀』において、「カシコシ」は「才能あり、能力がすぐれている」の意味を持つ「英才」などの漢語に充てられた和訓として使われる用例も見られる。これに対し、平安仮名文学の『源氏物語』、『枕草子』の用例を見ると、上記の意味以外に、独特の意味用法が見られる。

平安仮名文学では、次に示す用例のように、「カシコシ」が表す「畏敬」の意味が軽くなった。また、大切にする、慎重の意味を持つようになった。

(13)などてか、それをもおろかにはもてなしはべらん。**かしこけれど**、御ありさまどもにてもおしはからせ給へ。　『源氏物語・夕霧』

(14)とみのもの縫ふに、**かしこう**縫ひつと思ふに、針を引抜きつれば、はやく後をむすばざりけり。　『枕草子 91 段』

◆　サカシ

前節で述べたように、「サカシ」の意味にはプラス評価とマイナス評価の両方ある。上代の文学作品の用例や『日本書紀』古訓としての意味はプラス評価である。平安時代の「サカシ」は、判断がしっかりしていて物に動じないことをいった。自分自身の内に蔵する力、判断力によって事を決めて、その結果に自信をもっていることを表す。[6]

『枕草子』の「さかしきもの」の段は短い内容であるが、「サカシ」は四回使われ、そのうちの三例が「身分の卑しい者の小ざかしいこと」についてのマイナス評価である。同じ

[6]土居(2001：36)

意味用法は「源氏物語」にも見られる。

5.おわりに

本稿では、日本書紀の訓点本及び平安時代文学作品における「カシコシ、サカシ」の意味用法について、収集した用例を用いて考察を行った。平安時代以降「カシコシ、サカシ」の意味用法は拡大し、上代や現代よりはるかに意味用法が広い。「カシコシ、サカシ」の関係、中世以降の意味用法の実態、どのように現代語の意味用法に移行していったのかについての考察を今後の課題とする。

文　献

著作

石塚晴通(2006)『宮内庁書陵部影印集成・日本書紀』八木書店
内田貞徳(2005)『上代日本語表現と訓詁』塙書房
小島憲之ほか(1994-1998)『新編日本文学全集 1-3 日本書紀』小学館
杉浦克己(1995)『六種対照日本書紀神代巻和訓研究索引』武蔵野書院
築島裕(1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
築島裕・石塚晴通(1978)『東洋文庫蔵岩崎本日本書紀本文と索引』日本古典文学会
佐藤喜代治編(1983)『講座日本語の語彙 9 語誌Ⅰ』明治書院

論文

土居裕美子 2001「平安時代和文における『さかし』の意味用法について」『高知大国文』(32)高知大学
東辻保和 1967「源氏物語＜畏敬＞語彙の研究－＜かたじけなし＞＜かしこし＞考」『国語学』71
山崎馨 1977「形容詞さかし・さがし考」『松村明教授還暦紀念国語学と国語史』明治書院

辞書

大槻文彦(1907)『言海』吉川弘文館
石川孝ほか編(2011)『三省堂現代新国語辞典』三省堂
土井忠生・森田武・長南実編訳(1980)『日葡辞書：邦訳』岩波書店
中田祝夫編(1983)『古語大辞典』小学館
西尾実ほか編(2011)『岩波国語辞典(第 7 版)』岩波書店
山田忠雄ほか編(2012)『新明解国語辞典(第 7 版)』三省堂
日本大辞典刊行会(2001)『日本国語大辞典(第 2 版)』小学館

関連 URL

日本語歴史コーパス　https://chunagon.ninjal.ac.jp/chj
新編日本古典文学全集　http://japanknowledge.com.ezoris
web データに基づく形容詞用例データベース http://csd.ninjal.ac.jp/adj/